## ひなぎくの森 \*\* sawori

「だから、松山くん。毎年言ってるけど、花束は嬉しいけど、それ以上の事を期待されても 困るよ?」

可愛らしい外見の絵本専門店「街角ブック」の店主、小桃さんはとても素敵な人だ。しかも 松山店長の好きなメグ・ライアンの出ている「ユー・ガット・メール」に憧れて絵本専門店 を始めたなんて、店長にとってはまさに奇跡の人だろう。

「いや、小桃さん、そんな!期待とかそんな!ただこの駅前ロータリー商店街の同士として? エールていうか?このお店の小桃さんにデイジーの花束って、あの映画みたいで自己満なん ですよ。」松山はレジカウンターに肘をつきながら、ぐるっと店の中を見渡した。

「この、本を入れるエコバッグもいいよね。まじで小桃さん The Book Around The

Corner 再現してくれてるもんなあ。ほんとこの店最高。」

「でもそれを分かってくれてる松山くんの存在も嬉しいよ。松山くんのエバーグリーンハウスも最高だよ。頑張って商店街盛り上げていこうね!」

同士からの脱却、そしてトム・ハンクスへの昇格。それが松山の目下の目標だ。

「さあて、戻って店閉めて加瀬のライブでも見に行くかな。」

「加瀬くんってあの、松山くんがマネージメントしてる「トルーマン」でバンドの?」 「そうそう、今日 Free Man でクリスマスライブやってるんで、小桃さんも良かったらぜひ!」 「前に CD もらったでしょ。結構好きなの。加瀬くんの歌詞がいいよね。行けたら行くわ。」 「やった、まじですか!?歌詞いいとか喜ぶな~あいつカポーティファンだから。受付にフ リーパスでいけるようにしとくね。」

いそいそと、そしてルンルンと、店長はエバグリに帰って来ました。

「よし!店しめて Free Man でエバグリのクリスマスパーティ!加瀬のライブを肴に飲も一ぜっ。」

「店長飲めないくせに」氷のようなひなぎくの眼差し。

「酒のようなスパークリング。。。ジンジャーエールというものがある。」

「僕は du vin がいいですね、Bourgogne のものとか」

「そんなものは、ライブハウスには無あ~~い!!」

「え、じゃあ、champagne は?」

「フランソワ、日本のライブハウスの飲み物はビールかジンジャエールか烏龍茶なんだよ。」 フランス王子にジャパニーズ庶民の生话を教える、侍女のようなひなぎくであった。

~次号へつづく~

\*フランソワのフランス語レッスン!

du vin= ワイン、Bourgogne- ブルゴーニュ地方、Champagne- シャンパン

## \* ひなぎくの森のカルチャーその? \*

## トルーマン・カポーティ



トルーマン・ガルシア・カポーティ(Truman Garcia Capote, 1924年9月30日 - 1984年8月25日)は、アメリカの小説家。59歳という若さで亡くなっています。19歳の時に掲載された最初の作品『ミリアム』でオー・ヘンリー賞を受賞し、「アンファン・テリブル(恐るべき子供)」と評される。

「ティファニーで朝食を」は、オードリー・ヘップバーン主 遠で映画化されています。





実際に起こった、一家り 人殺害という凄惨な事件 を徹底取材して書いたノ ンフィグション小説。映 画化されています。実話 だけに重いラスト、、、



「カポーティ」 フィリップ・シーモア・ ホフマンがカポーティの 人生を演じた映画。

「書くことの最大の喜びは、その内容ではなく、言葉の紡ぐ音楽」

というカポーティは流れるような品のある文章を書く天才。まさに音楽のような言葉を紡 ぐ。エバグリでバイトしている加瀬くんのバンド「トルーマン」は、加瀬くんの崇拝する トルーマン・カポーティから名付けたという設定。小桃さんも気に入っています。

(前回までのあらすじ)フランス人留学生フランソワと、レコード店員ひなぎくのカルチャー交流記。クリスマスに※エバグリで臨時バイトしたフランソワと松山店長が意気投合。閉店間際、松山は同じ商店街の「街角ブック」小桃に、毎年恒例のデイジーの花束を届けに走る。フランソワは不満そうなひなぎくの顔を見て松山が好きなのだと悟る。 \*\*エバグリ=エバーグリーンハウス(ひなぎくの働くレコード店)